

サンクト・ペテルブルグに 滞在して

〈ロシア〉

郡 伸哉

私のみた 海外の大学事情

サンクト・ペテルブルグ（旧レニングラード）は、夏は真夜中でも薄明るく、冬は昼が短い。北緯約六十度に位置するこの町は、人口五百万、ロシア第二の都市で、この規模の大都市としては、世界で最も北にある。一八世紀初め、ピョートル大帝によ

って、ロシアの近代化・西欧化を担う首都として建設されて以来、この町は、たび重なる洪水の被害、革命、第二次大戦でのドイツによる九百日間の包囲など、悲劇的な歴史を生き抜いてきた。その一方、三百年の歴史のあいだに、市内の建築群、郊外の多数の離宮、美術館や博物館の貴重な收藏品、書籍など、膨大な文化遺産が蓄積され、多数のすぐれた人材を輩出してきた。

サンクト・ペテルブルグはまた、水の都である。ネヴァ河がフィンランド湾に注ぐ河口に広がり、運河も多く、いくつもの島から成りたっている。そのなかで、ワシリー島という島は、かつて行政の中心地と目論まれたが、現在はここに、学問に関する施設が集まっている。すなわち、サンクト・ペテルブルグ大学、科学アカデミー本部、科学アカデミー図書館、人類学・民族誌学博物館、動物学研究所・博物館、ロシア文学研究所、芸術アカデミーなどである。どの施設も由緒ある壮大な建物を使っている。たとえば、一八世紀初頭、町の創設期

に建てられた「十二のコレーギヤ」という行政機関の建物が、その一世以後に、ペテルブルグ大学のものになった、という具合に。

わたし自身のいたロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所、別名「プーシキン館」も、一八二九—一八三二年に建てられた昔の税関の建物を使っている。この建物は島の尖端近くにあつて、小ネヴァ河を隔て、ペテルブルグ建設の起点となったピョートル・パーヴェル要塞が見え、大ネヴァ河を隔てたところには、有名なエルミタージュ美術館がある。ロシア文学研究所は、創立が一九〇五年で、手稿部には、フォークロア、中世ロシア文学、プーシキン、その他の作家の重要な手稿を多数納め、研究者たちは、時代別、作家別などにグループを作つて、全集の編纂、論集・雑誌の発行、国際会議の主催、大学院生の指導などを行っている。世界各国の研究者たちが頻繁に訪れ、ロシア文学研究のセンターとなつてい

サンクト・ペテルブルグにわたしが滞在したのは、昨年春からの一年間だが、留学先の機関が研究所だったので、大学の内情や、学生生活の実体は知らない。ただ、ここ数年の間に、体制の変化に伴って、ロシアの大学も大きな変化を遂げたことは確かである。手元にある入学志願者用大学便覧によると、かつてソビエト連邦全体に五百ほどの高等教育機関があったが、現在では、旧ソビエトの一部であるロシア共和国だけで五百の教育機関が存在するとのことである。かつては、すべて国立であったが、現在は、地方自治体立、私立の大学ができ、大学を表す名称も、以前からあったウニヴェルシテート（総合大学）、インスティトゥート（単科大学）のほかに、アカデミーヤ、コレッジ、高等教育センターなど多様になっている。

ロシアの経済状態の悪さは、当然、研究者や学生に大きくのしかかっている。まず、公務員の給料運配が長い間、問題になっている。また、交通費が値上げになって、学

生は大打撃を受けたとか、大学のなかには、冬のあいだ暖房もできないところもあるというニュースもあった。体制転換の初期には、研究者が、それまでとはまったく無縁な職業に転じた例が多々あったようである。たとえば、ある理科系の博士は、研究を捨てて、食品輸入の会社を作った。現在、食品店に並ぶ品物は、ロシア産がほとんど姿を消し、外国製品ばかりとなっているので、まさに時流に投じたわけだ。私の知っているロシア文学研究者に聞けば、研究分野のおかけか、活動的な人びとは短期、長期で海外に客員教授として滞在することを繰り返して、若い研究者は、海外滞在の機会を狙って、学術雑誌などで募集欄を見ている。もちろん、研究分野によっては、いわゆる頭脳流出が多くあるのだろう。

食品輸入の例も、海外滞在の例も、外国と関わるのが、かの国では生きる助けになることを示しているが、経済的に外国に依存する構造は、いたるところに見られる。われわれ外国人の目につくところという

と、ホテルで売っている劇場の切符代が高いとか、家賃を外国人から極めて高く取ろうとするのは、個人や企業のレベルの問題だろうが、外国に出す郵便の値段も、他の物価と比べて非常に高いし、国立の博物館では、軒並み、外国人価格はロシア人価格の何倍もするといった具合に、外国人から多く金を取ることが公的に行われている。

わたしにとって苦痛だったのは、外国に物を送ったり持ち出す際、古書など貴重なものはわかるとして、画集から、辞書、地図、便覧類までもが、発行年に関わりなく一律、許可を取って税を払わなければならないことである。あるとき、ロシアで買ったものではなく、日本からもってきた英和辞典ならいいだろうと思つて郵便局にもつていくと、辞書と名のつくものは一切許可なしでは受け付けないと言われたこともある。許可を取って送るまでに大きな手間を強いるわりには、国にとつてたいした収入になるとも思えない。現状に合わせた制度のつもりなのか、ソビエト時代の外国人隔

離の名残りなのか、解せないことである。

しかし、外国との行き来は着実に増えている。西欧の町を歩いていて、ロシア語を耳にする頻度の多いことに驚く。もつともそれは、たいてい、「新ロシア人」と呼ばれているような金持ちたちだけだ。他方、ロシアに来る外国人、とくに長期で滞在する人の数が増えた。語学留学生も多い。各地の大学は、それぞれ、外国人学生向けに、ロシア語学習のコースやセンターを作つて、ロシアの基準からすれば安くない価格で外国人留学生を集めている。

外国の研究者がロシアの研究機関で研修するにも、かなりのお金を払わされる。その額も、有力者を通せばただになつたりするし、なかには、交渉で額が変わつたり、徴収した金自体どう使われているのか怪しい例もあると聞いた。

研究の中身についてはどうか。これは分野にもよるが、人文科学に關していえば、全体として研究者は、生き延びる道を探しながら、健闘しているという印象を持った。

ソビエト時代に抑えられていた西欧の現代の思想や学問が、つきつぎと翻訳・紹介され、ロシア人研究者のソビエト時代の優れた著作が本になつたり、再版される。ロシア文学研究でも、欧米の最近の研究書が翻訳されていく。そのせいかロシア人の現在のオリジナルな研究の出版が目をはく度合いが低いという印象を受けた。

ことに自国の歴史の通史などはそうで、学校の社会科の若い先生に、ロシア史の大枠を知るにはどんな本がいいか尋ねると、ロシア革命前に書かれた本を紹介された。本屋で聞くと、それはいろんな大学で推薦図書になっているとのことだった。ソビエト時代の歴史は措くとしても、学生たちは、それ以前のロシアの歴史を、遠い過去の著者の本で学んでいるということになる。

しかし、もし現在の、あるいは将来のロシアの文化に何かを見いだそうとするなら、ロシアが過去の体制と決別し、外に開かれたことから来る側面と並んで、ソビエト時代の蓄積の継承という面を切り捨てる

ことはできない。そうした蓄積の大部分は、国のイデオロギーへの表面的ないし実質的同調を保ちながら蓄えてきたものであり、その意義を正當に評価するのは難しい。しかし、その時代にも優れた知の営みがあったからには、そこには、われわれがもつと知る価値のあるものがたくさんあるはずだ。それは微妙な問題を含むだけに、かえって魅惑の光を放っているような気がする。ロシアでの、いまだ必ずしも心地よくない生活の日々、けつして明るくはないペテルブルグの空の下、澱んだ川のほとりを歩きながら、わたしは、そんなことを考えていた。

こおり・しんや

中京大学・教養部